

猿の夢日記 (2010年7月20日)

齋藤 恭司

Kavli IPMU 主任研究員

IPMUの屋上で初めてビアパーティーがあった。高田さん、*1 加藤さん*2 と話していたら、高田さんから言われた。「加藤さんから見れば、IPMUの僕ら研究者は皆人間じゃない、猿なんですよ。宇宙人もいるし。まあ、中には人間も居るかもしれないけど」とちらっと村山さんの方を見た様な気がした。「ヒャッホー、俺は猿なんだ。確か俺は餓鬼道に落ちていたはずなのに、畜生道まで上がったのか？俺自身そんなに高まった気もしないが、それでも猿になれたのは嬉しい」等と思っているうちに目が覚めた。

山の奥の奥の、その又奥の深いこの山々こそが俺の生まれ育った場所なのだ。何だ、俺は最初から猿だったんだ。でも、自分の生まれ育った山のボスに反抗して、結局山を飛び出して、自分の山を築いてきた。今は、家族も仲間も大勢居る。でもなんか物思いに沈む此の頃だ。おれはこの山の大将だ。この山の事は何でも好きにできる。だけど、何か足りない。

俺にはとても届かないあの空に光る星たち。あれは何なんだ。俺はどうしてここに居るのだろうか。俺は何なんだ。分からない、分からない！胸をかきむしりながら、考える。

聞く所によると、人間とかはスバルとか言うもので星の彼方を知ろうとしているらしい。LHCとか言うもので、この山全部を砂粒位に縮め、更にまたその砂粒を同じ位に縮め、、、そんな小さい所で起きている事を



知ろうとしているらしい。人間の世界では数学とか言うものが有って、宇宙の始まりから終わり迄を更に超えた真実を見逃かす事が出来るらしい。

あああ、俺も人間になりたい。人間になって、俺が何なのか知りたい。宇宙を知りたい。聞くところによると、今から五百万年後に真実を求めて旅をする坊さんが此処を通るらしい。そうだ！俺はその人間について行って、真実が何なのかを見届けるのだ...

そういう訳で、家族や山の仲間たちを呼び集める。「お前等には世話になったな。感謝している。しかし今日を限りに俺は山をおりて旅にでる。五百万年後に此処を通る坊さんについて行くのだ。もう俺の事は考えてくれるな。これから後の山の事は任せる。お前等仲良くやってくれ」等と格好良くも無責任に言い放って山を下りる。

そして、言うに言われぬ五百万年放浪の旅（そこにはとても一口では言い切り得ない、いろんな事が有ったのだが）の末、ようやく明日こそはその三蔵ヒトシとか言う坊さんに巡り会えると思っている所でまた夢から覚めた。

これはどういう事なんだ。でも、この夢もまた覚めるかもしれない。忘れないうちに夢を書き留めておこう。

*1 高田 昌広 IPMU 准教授(当時)。現在、Kavli IPMU 教授。

*2 加藤 康洋 予算管理係長(当時)。

